評論

「ふるさと」を環境教育の場に

藤岡　和佳
京都大学人間・環境学研究科　日本文化環境論講座　修士課程

A Proposal for Environmental Education in our own Home Place

Waka FUJIOKA
KYOTO University Graduate School of Human and Environmental Studies

（受理日　1997年5月19日）

1. はじめに
（「たまごっち」の大流行にみる子どもの状態）

平成9年の年が明けると同時に，今年のおもちゃの売り上げナンバー1が決まったと言われた．それは「たまごっち」というキーホルダー型の小さなコンピューターゲームである．「たまごっち」の流行は爆発的である．主に小学生から高校生までが長蛇の列を作っておもちゃ屋に並び，製造が追いつかない程である．このおもちゃは，その名の通り卵から生き物が生まれ，持ち主が餌や汚物の世話をするとその生き物が成長してゆく，いわば生き物を育てる過程が疑似体験できるおもちゃである．この「たまごっち」の大流行の要因はいろいろ考えられるが，そのベースに以下の二つの事があるのではないかと考える．

一つは，子どもたちの本性として「生き物を育てたい」「命あるものを慈しみたい」という欲求があるのではないかということである．これは，彼らに未来を託そうとするとき，非常に明るい希望である．子どもたちはその欲求を満たすために，バーチャルリアリティで代用し楽しんでいる．だが，リアリティ（本当の，現実の）体験を経ないままでのバーチャルリアリティは，寂しすぎはしないか．

そしてもう一方で言えることは，そのような子どもたちが本来持っている心を，今の大人たちが作り出した生活文化が奪ってしまっているのではないかということである．実際に生き物に触れる機会がなければ，コンピューターゲームの作り出す仮想生物と実際の生物の違いがわからない人間になりはしないか．生命の重さ，自然の偉大さを感じることのできる人間に育つであろうか．未来を託すべき子どもたちの本来の人間らしい欲求や性質を生かし伸ばす機会を，大人たちの都合で奪ってしまってよいのか．

「たまごっち」の大流行は，多くのことを語りかけているように思える．仮想現実と現実の区別の明らかでないであろう子どもたちには，現状に応じた環境教育が必要と考えられる．

2.「環境問題」への取り組みの視点

現代の子どもたちは，自然破壊や環境汚染などの「環境問題」について，かなり多くの知識を持っている．例えば，「木は二酸化炭素を吸収し酸素を放出する．よって乱伐によって森林が減少すると吸収される二酸化炭素量が減るので，温暖化に拍車をかける．」という現象の因果関係を，教科書やメディアを通じて知っている．しかし，これらのグローバルで抽象的な「環境問題」の根っこが実は自分たちの生活にあることを，どこまで感じ取っているだろうか．

子どもにとってステレオタイプ化している「森を減らしてはいけない」「森は大切である」などの答えは，問題の表面しか捕えていない．「誰が木を切らせているのか」「どうして木を切らなけ

（問い合わせ先）〒606-01 京都市左京区吉田二本松町 京都大学人間・環境学研究所A407 薗田研究室

ればならないのか」など，問題の裏側まで突き詰めて考えてゆかなければならない．そうすると，グローバルな「環境問題」であっても，根本的な問題は，我々の生活スタイルのあり方であることがわかる．そして具体的に「我々に何ができるか」を考え，実行してこそ意味がある．

しかし，便利さ・合理性ばかりを追求してきた現代の社会システムの下では，生活スタイルを変えることは，よほど強固な意志がなければきわめて困難である．抽象的な問題の解決のために，人はどこまでその意志を貫き通せるのか．

そこで視点を生活の場自体を見直すことを重点に考えてはどうか．例えば，身近なところに自然を見つけたり，町の歴史を調べてみたり，近所の人々と交流するなどごく簡単で楽しめることを，地域を舞台に始めてみる．そうするうちに，地域に関心を持つようになり，愛着がわき，積極的に地域の問題に関わりを持つ人間に成長するのではないだろうか．そうして各地域で住民が暮らしを改善して，地域の良さを保つ努力がなされれば，結果として，グローバルな「環境問題」の解決に到達できるだろう．特に子どもたちに地域で具体的に考え行動する姿勢を身に付けさせることは，「ぼくも（わたしも）できるんだ」という実感をともなった自信を持たせ，何よりも「環境教育」となるだろう．つまり「環境問題」は，現在の大人たちが環境にどのように影響を与える生き方をしているか，そしてその結果未来がどうなるかという視点と，未来を担う子どもたちが環境についてどう考え，どのように関わってゆくかという視点の両方向から解決の糸口を探すべきである．前者は大人の，後者は子どもの「環境教育」である．

3.本当の「ふるさと」づくりの必要性

近年よく耳にする「ふるさとづくり」とは，本来，このように地域に関心を持ち，関わってゆく姿勢を表わすことばでなければならないと考える．現在，「ふるさと」の有無を尋ねると，八割以上の人が「有る」と答える（Kyung 1995）にもかかわらず，高度経済成長期以後，現代は「ふるさと喪失の時代」だと言われてきた．この両者の矛盾は何か．前者の「ふるさと」は，「自分が生まれ育った場所，肉親が住む場所」のように，単に場所を示すことばと受け取った人が多いからだろう．だが，後者の「ふるさと」は，「過去の豊かな体験や記憶を現代的意味に復活させてくれることば（進士1996）」であり，「安定した心のよりどころ」である．つまり，この矛盾は，「ふるさと」を場所とすれば前者になるが，心のよりどころとしての「ふるさと」を持っていないという現象の現われであろう．

進士（1996）は，過度の都市化と集中とそれに基づく無機的なライフスタイルがもたらす環境の激変が，人々の精神環境の安定を破壊しつつあり，それが現代人を「ふるさと喪失」状況に追いやってきたのではないかと問いかけ，また田中（1996）は，現代の人々が不安感に悩まされているとするならば，心の支えとなる故郷を喪失しつつあることが，かなり重要な要因の一つと考えている．精神的な不安を取り除くためにも，生活の場に関わりを持ち，そこが心のよりどころとなることは，今後ますます必要とされるだろう．

4.現代人の「ふるさと」イメージ

ここで，具体的に「ふるさと」のイメージを知るために，平成8年度環境教育学会の2日目に，参加者に協力をお願いしたアンケートの一部を紹介する．アンケートは自由回答形式とした．回収数56（回収率29.6%）であり，回答者の年齢と性別は以下の通りである．

年齢層	男性	女性	合計
70代	1	0	1
60代	4	1	5
50代	4	2	6
40代	12	5	17
30代	11	3	14
20代	4	6	10
10代	2	0	2
計	38+(1)	17	56

（）は年齢無記入者

＜回答例＞

- 近くに池や雑木林があり，小学校へ入学する前の子ども時代，毎日のようにそうした身近な自然に親しんだ．ふるさとというと子ども時代に親しんだ身近な自然を思い出す．(70代男性)
- イメージするのは，生まれ育った○○，○○山のふもと，そして駆け回って遊んだ境内．40回以上も引っ越しをして長く関東で暮らしているのでかえってなつかしく思うのですが，記憶にある○○はもう現実には変わってしまって私の知る人もなく訪ねて行けば戸惑うことでしょうね．(60代女性)
- 水の上を吹く風．アマガエルの鳴き声．キリギリスの鳴き声．晩秋にあちこちの田んぼで燃やす煙．初秋に稲穂の上をわたる風．(60代男性)
- 子どもの時体験した自然，遊び．春の小川でのドジョウ・小魚採り．夏の海水浴．秋，田での遊び，山でのシイの実やヤマイモ採り．冬，雪投げ合戦．近所の人々，小中学校の友人．(50代男性)
- 春にはれんげと菜の花と麦の穂のみどりとのパッチワークのようながめ．秋には稲穂の中に赤い彼岸花の列がみえる風景．やきいものにおい．(50代女性)
- やすらぎ，畑，牛，おだやか．おじいちゃん，おばあちゃん．原風景が消失，都市化する問題が今日ある．(40代男性)
- 生まれ育ったところでずっと過ごしてきましたので，ふるさとにたいしてなつかしく思うようなことはありません．たまに仕事で都会へ数日出かけることがありますが，帰りついたときには，ホッとするところです．(40代女性)
- 「自分にはふるさとが無い」という子どもの頃の「寂しい気持ち」を思い出します．自分も両親も東京生まれの東京育ちです．‥夏休みのお盆の10日間に，友達が「田舎へ行く」と言い，いなくなり，10日間ぐらい，公園で遊ぶ相手がいなくなり，埋め合わせとして父が映画やドライブにつれていってくれた．
  「ふるさと」とはテレビや映画でみる山や小川や田んぼのある光景でないといけないと思い込んでいた．そして，我が家にはそれが無いと認識していた．(30代男性)
- ホッとする，何も考えなくてよいところ．自分にとってはなくしたところ（ダムで）．子どものころ．夏休み．虫とり．さがしている．(30代男性)
- いわゆる「いなか」．第一次産業を中心とした生活．(自分の母方の実家の姿そのもの，毎年必ず何回か訪れていた所)(30代男性)
- 映画「ふるさと」ー自分にはない，持っていない．僕の「ふるさと」は，体験として持っている訳ではないが，それは日本的「ふるさと」の原像が強すぎる，もしくはあこがれが強いためです．２面護岸の○川や，鉢植えが並んだ家の前のアスファルトが体験としてのふるさとであり，僕自身はそういった人工物に郷愁を感じます．しかし，どこでもよいという訳でなく，現在居住するところでは感じません．おそらく古さ（＝人との関わり合いの密度）の差と思います．(20代男性)
- 主に心の落ち着き（「安らぎ」という方がよいかもしれませんが）を得る「場」→見慣れた（原）風景の存在，姿があること．自分を育んでくれた人々との思い出があるものでもあり，「世界」があるかもしれません．(20代男性)
- 母の実家にあたるところが○○にあって，そこが「ふるさと」という気がします．自給自足に近く，山の中に集落があって，泳げる川と湧き水がある‥，そんな中夕暮れまで，村の子と遊びまわることができる場所です．夜は，熊をこわがりながらホタルを見に行きました．のんびりするというか，ホッとするというか，疲れた時にふと思い出すイメージが「ふるさと」にはあります．(20代女性)
- いてて安心できるところ，父や母がいるところ．歌がある．電車にのっていくところ．(10代男性)

特に目立った回答として，56人中35人が「ふるさと」イメージに，田舎，田畑，山，雑木林，小

川，池などの農村的風景要素を挙げていることがある．同じく農村的風景イメージと一部重なる部分があるが，具体的に子ども時代に遊んだ事や，見た風景を連想した人が3分の1を占めた．これらの人々は自分の原風景を想起したと考えられるが，そのほとんどが自然との接触体験であった．これらは，ふるさと風景イメージが自然体験の有無に関わらず，農村的風景が主であり，ふるさとイメージの中で連想される自然体験は，児童期の遊び場と強く結び付いているという Kyung（1995）の調査結果と一致する．さらに，青年を対象に原風景の特性を調べた結果，日常的な遊び活動が「原風景」の形成に最も主要で，最も影響する活動であるとする茂原ら（1991）の結果にも当てはまる．

また，父親，母親，おじいちゃん，おばあちゃん，友達，近所の人など人間的要素を挙げる人も多かった．ふるさとのイメージには，自然と人間要素も重要といえる．

しかし，一方で，ふるさとを持たないとする人，失ったという人も少なくない．先に述べたように，「ふるさと」イメージが農村風景と結び付いているがゆえに，都市で生まれ住んだ人や，「生まれ育った場所」の風景や人間的要素が激変した人が，「ふるさと」がないと感じているのかもしれない．もしくは「心のよりどころ」という意味での「ふるさと」がないためかもしれない．

気付いた点として，回答者の中の比較的若い世代（30代以下）には，テレビや映画で見た風景を連想する人が現われた．「ふるさと」が身近にはない農村風景のイメージと一致する傾向と，最近の子どもは農村を記憶よりはメディアを通して受け入れている（小林ら1996）ことに関係があるだろう．

全体を通しての印象であるが，子ども時代に自然（特に農村）体験をしたことがある人，つまり「ふるさと」の原風景を持つ人と，「ふるさと」と言われてもあまりピンとこない人の大きく2つのタイプに分かれるように感じられた．前者の回答からは，子ども時代の遊びや体験を生き生きと表現し，楽しさや風景の美しさが伝わってくる．このような楽しい子ども時代を送った人は，自分の子どもにも同じように楽しい体験をさせてやりたいと思うであろう．

5. むすび

進士（1996）は，原風景を育てるには，まず住民としてどれだけ深くその町に関わっているかということが重要であると主張している．Kyung（1995）の研究からも，児童期に農村的自然に接した人は，地域に対する愛着，ふるさと感を保持する傾向が強いという結果がえられている．また，人は原風景に現われる事物に対する関心が相対的に高くなる（茂原ら1991）．つまり，特に子ども時代に関わったものに対して，人は関心を持ったり愛着をもつということである．子どもの頃から地域に関わりながら大きくなれば，地域への愛着心が生まれ，おのずと地域に関わってゆく姿勢を身につける．例えば，小学生の時期に農村体験をしている人は，農村の保存にも積極的であり（小林ら1996），小学生の町並み保存活動への参加も町並みへの思いが強いほど参加意識が高い（曲田1993）．さらに，過去の空間体験を通して形成された心象風景が，将来の希望定住地といった環境の志向性にも影響を与えていることもわかっている（澤田ら1995）．このように，感受性豊かな子ども時代に志向性は育てられ，子どもの頃から地域社会と何らかの関わりを持っていれば，その地域をより良く保つために考え行動できる人間が育つということである．また，我々の日常の生活スタイルが地球規模の環境問題と深い関わりがあるからには，子どもの頃から自然に親しみその素晴らしさを実感していることは，自然破壊等の地球規模の問題にも関心を向け，具体的に貢献の方法を考え実行できる人間が育つための第一歩であろう．

しかし，最近都市はもちろん農村に住む子どもでさえも，塾通いなどで忙しい毎日を過ごし，外で遊ぶことが少なく家の中でテレビゲームなどの一人遊びを好む傾向にあるという．子どもの行動範囲がある意味で片寄りつつある今こそ，我々大人は，暮らしの中でどのようにすれば子どもたち

が原風景を育てられる体験ができるかを考えるべきである．言いかえればそれは子どもとともに「ふるさとづくり」を考えてゆくことである．感受性豊かな子どもたちに地域の中で楽しい体験をさせることは，地域と地球のつながりを理解し，将来再び地域のために活動してくれる力強い次世代を育てることにつながる．また，地域と関わりを持つことは，我々自身のやりがいや楽しみを増やし，自分自身の存在意義を確認できる活動となるであろう．

原風景や「ふるさと」は，自然や人間，人間同士が織りなすさまざまな関わりの賜物である．したがって，「ふるさと」で経験することは全て，環境や社会の様々な状況下でどのように生きてゆくかを学び考える訓練となる．そういう意味から，「ふるさと」は何よりも環境教育の場であるといえる．子どもたちと一緒に「ふるさとでどのように暮らすか」を問い直す試みを，ぜひ行ってほしいと思う．

終わりに臨み，本アンケートの実施にご協力下さった方々に心よりのお礼申し上げます．

引用文献

進士五十八，1996，原風景の生きるまちづくり，東京農業大学農学部造園学科庭園学・造園学原論，30-36.

田中宣一，1996，故郷および故郷観の変容，日本民俗学206：特集第47回日本民俗学会年会公開テーマ講演『“故郷”を問う』，2-12.

小林規久男・志摩邦雄・小柳武和，1996，世代間の心象風景からみた農村景観の構造化に関する研究，第31回日本都市計画学会学術研究論文集，643－648.

Kyung-Rock Ye，1995，児童期の自然体験とふるさとイメージとの関連，第30回日本都市計画学会学術研究論文集，217-222.

澤田幸枝・土肥博至，1995，心象風景が景観の評価構造に及ぼす影響，第30回日本都市計画学会学術研究論文集，211-216.

曲田清維，1993，子どもの景観認識に関する研究，第28回日本都市計画学会学術研究論文集，37-42.

茂原朋子・渡辺貴介・十和田朗，1991，青年の“原風景”の特性と構造に関する研究，第26回日本都市計画学会学術研究論文集，457-462.